タキシラにおける仏教寺院の仏塔基壇の形態と変遷について

－ガンダーラ仏教建築における仏塔に関する研究 その2－

THE CHARACTERISTICS AND TRANSFORMATION OF STUPAS PLINTHS
ON BUDDHIST TEMPLES IN TAXILA

A study of forms of stupas in the Gandhara buddhist temples Part II

加藤 直子*, 矢谷 早**, 増井 正哉***

Naoko KATO, Saki YATANI and Masaya MASUI

This study discusses the transformation of stupas in the Gandhara Buddhist temples focusing plinth forms and masonry techniques. The second article takes up the remains of two archaeological sites, Dharmarajika and Jaulian, located in Taxila where is the east region of Gandhara in the broad meaning. This article studies the features of stupas based on the excavations reports carried out at Taxila by John Marshall. Consequently, the features found in Taxila were one-story type, two-story type and step-down type, and these are the same as Central Gandhara's. The Taxila's characteristic features are stupa with platform, form of relatively-high platform and plinth base, and heavily usage of *Kanjur* stone.

Keywords : *Stupa, Buddhist temple, Buddhist site, Gandhara, Form of plinth, Taxila*

仏塔, 仏教建築, 仏教遺跡, ガンダーラ, 基壇形態, タキシラ

1. はじめに

本研究は、ガンダーラ仏教寺院における仏塔の形態を建築史学・技術史的視点から明らかにすることを目的とし、ガンダーラにおける仏教遺跡の保存修復のための基礎資料と位置付け、実際、保存修復の対象となる漆喰装飾の下地である石積み部分を分析・考察の対象としている。前稿では、調査対象地3地域のうち、中央ガンダーラを取り上げ、ラニガト遺跡とタフティ＝パヒ遺跡を対象として、基壇形態の分類、石材と石積み法、装飾要素等とそれらの変遷について考察を行った^{注1)}。本稿ではタキシラを取り上げ、当地域の特徴を明らかにするとともに、中央ガンダーラとの比較も行う。

2. 対象地域と研究の概要

2-1. タキシラの概要

タキシラは、パキスタンの首都イスラマバードの北西約30kmに位置し、古代からガンジス川中流域と中央・西アジアを結ぶ交通の要衝として発展し、仏教経典には一大学術都市タクシャシラー *Taksasila* として名が記されている。そしてアケメネス朝やマウリヤ朝等の4つの都市遺跡（ビールマウンド、カッチャコート、シルカッブ、シルスフ）をはじめ、多くの仏教寺院等の遺跡が残る。

これらの遺跡では、当時のインド考古調査局 (Archaeological Survey of India, 以下 ASI) 長官ジョン・マーシャル John Marshall (以下、マーシャル) により、1913～1934年の22年間にわたり、発掘調査

が行われた。その内容はASI年報^{注2)}にも逐次報告され、最終的に1951年刊行の報告書（以下、報告書）にまとめられた^{注3)}。この報告書は、タキシラという一地域の研究のみならずガンダーラ研究の貴重な基礎資料となっている。またマーシャルは、組織的な発掘調査と同時に遺構の保存の必要性も説き、調査直後に修復や覆屋設置等の保存事業も行った^{注4)}。

本稿では、調査対象遺跡として仏塔が多数遺存するダルマラージカ遺跡とジョーリアン遺跡を取り上げ、研究の方法としては報告書をはじめとした関連資料^{注5)}を確認した上で現地調査を行い、各遺跡における仏塔基壇の形態とその変遷について分析・考察を行う。

2-2. タキシラにおける石積み法と編年

マーシャルは、発掘調査により明らかになった層位とそれに対応する石積み法の変化、遺構の切りあい関係等から、タキシラにおける石積み法の前後関係（時期差）を考察し、各石積み法に年代観を与えた（図1）。その概要をまとめると、石積み法の変化は断絶な

図1 マーシャルによる石積み法の分類と年代観 出典：参考文献2

* 奈良女子大学大学院人間文化研究科

** 奈良県教育委員会文化財保存事務所法隆寺出張所(非)

*** 奈良女子大学生活環境学部 教授

Graduate School of Human and Culture, Nara Women's Univ.
Office of Cultural Assets, the Board of Education in Nara Prefecture
Prof., Nara Women's Univ., Dr. Eng.

く連続し、野石積み rubble masonry から地文様積み diaper masonry、そしてセミアシュラー semi-ashlar masonry へと変化する。野石積みから地文様積みへの変化は、紀元後 25 年頃の地震がきっかけとなり、地文様積みからセミアシュラーへは、地文様積みの地石と詰石で構成される層の間に、切石層が挿入されるようになる変化である。さらに地文様積みでは、時期が下ると詰石が大きくなり、地石の加工度が増し、セミアシュラーでは、時期が下ると切石層が一層から二層、三層になるという変化がみられる。

本研究では、タキシラにおける遺跡の各遺構の築造順序の判断基準をマーシャルの石積み法の変化による編年に依拠し、石積み法の変化を築造時期の差と判断することとする^{注6)}。

3. ダルマラージカ遺跡の仏塔

3-1. 遺跡の概要

ダルマラージカ遺跡は、タキシラの第三都市シルカップの東南、ハティアール山の南麓に位置し、タキシラで最古の仏教寺院とされる。遺跡は塔院地区とその北側の僧院地区からなり、塔院には、アショカ時代に遡るともいわれる大塔^{注7)}を小塔や祠堂が取り囲み、さらにその周囲に仏塔と祠堂が点在する。また僧院地区には、いくつかの時期にわたり築造された方形僧院が確認できる(図2)。

マーシャルは各遺構を、築造時期により石積み法が異なることをふまえ、8 種に分類した^{注8)}。その分類では、まず前期の石積み法として①野石積み early rubble、②内部を野石積みとしたカンジュールによる石積み early rubble with kanjur facing、③地文様積み early diaper、④内部を地文様積みとしたカンジュールによる石積み early diaper with kanjur facing が現れ、次に⑤セミアシュラー semi-ashlar、⑥内部をセミアシュラーとしたカンジュールによる石積み semi-ashlar with kanjur facing、後期の石積み法として⑦後期の地文様積みまたは後期の野石積み later diaper or later rubble、さらにそれ以降のものとして⑧中世の石積み medieval nondescript masonry となる。

報告書によると、塔院の変遷としては、まず大塔が築造され、それを囲むようにいくつかの構造物が設けられた。そして紀元 25 年頃の地震で多くの構造物が破損・崩壊したが、大塔は放射壁を用いて修理され^{注9)}、その周りの既存の構造物が削平されて、環状に祠堂等が築造された。さらにその周囲に仏塔、祠堂が逐次築造された。

ダルマラージカ遺跡では、報告書に掲載された配置図によると、

図2 ダルマラージカ遺跡配置図 出典：参考文献 3, 7 を筆者が修正

遺構に関する記述があるものの他にも仏塔と考えられる正方形または円形平面の遺構がみられる。しかし発掘調査以後、消滅した遺構もあり、報告書と現地調査で遺構の存在が何らかの形で把握できた仏塔遺構は 74 基であった^{注10)}。

なお当遺跡の年代を示す史料としては、アゼス王の 136 年 (A.D.79 年) にタキシラのダルマラージカ大塔祠堂にブッダの遺骨を安置したことを記した銀薄板カローシュティ銘文が塔院北西の祠堂 G5 で出土したことがあげられる^{注11)}。

3-2. 基壇形態

ダルマラージカ遺跡において、基壇形態の分類が可能な遺構^{注12)}は、74 基中 20 基であった(表 1)。基壇は、円形と方形のものがあり、円形基壇のうちの 1 基は塔院の中心に位置する大塔で、基壇の四方に階段が設けられ、テラス状の部分が繞道としての機能を持ち、他の仏塔とは構成が異なる。もう 1 基 (B3) は後補の遺構により形態の詳細は不明であった。そして方形基壇には単層型、積層型、複層型がみられた(図3)。単層型には柱形があるものとないものがみられ、積層型では上成基壇が下成基壇よりセットバックしているもののみがみられた。また基壇下部と壁面が部分的に遺存するが、分類が判別不能であった遺構は 22 基であった^{注13)}。

また基台の上に築造された仏塔を 17 基確認した。基台の現状の地表面からの高さは、切石一石分すなわち高さ 20cm 程度のものがほとんどであったが、60~100cm 程度の比較的高いものが 2 基みられた (St.2, N13)。また当遺跡内では、遺存高さが 40cm 以上でモールドディング等装飾のない正方形平面の台状遺構が 10 基確認できたが、これらは基台の高い仏塔の基台部分のみが遺存したものと考えられる。なお基台の高い仏塔は、2 基とも複層型であった。

3-3. 石材と石積み法

ダルマラージカ遺跡の仏塔には、カンジュールと石灰岩の 2 種類の石材が使われていた。この 2 種は、タキシラ地域において容易に入手できる石材であることがわかっている。

石積み法について述べる。上述したように本研究では、外装すなわち漆喰下地としての石積み法を分析の対象としている。そこでマーシャルの遺構分類を参考に現地調査を行い、外装すなわち漆喰下地としての石積み法を観察したところ、①野石積み rubble masonry、②地文様積み diaper masonry、③セミアシュラー semi-ashlar masonry、④切石積み (図3, St.1 壁面)、⑤漆喰装飾の下地として加

表 1 ダルマラージカ遺跡における基壇形態 () は基台を伴う遺構

単層型 柱形なし	単層型 柱形あり	積層型 上成基壇セットバック	複層型	円形基壇	判別不能		計
					基壇壁面一部遺存	不明	
6 (0)	1 (0)	2 (2)	9 (6)	2	22(9)	32	74
20 (8)					54 (9)

図3 ダルマラージカ遺跡における基壇形態

工した石材を積む石積み（図 3、N4,R5）の 5 種類を確認した^{注14)}。
そして使用部位と石材の関連については、カンジュールは石積み法㊟、㊿のすべてと、㊿～㊿における漆喰下地材として装飾の加工を施す部分に用いられ、それ以外は石灰岩が使用されていた。

3-4. 装飾要素と製作方法

次に装飾要素とその製作方法について述べる。基壇の装飾要素として、モールディング、柱形、肘木列、壁龕の 4 つがみられたが、これらはすべてカンジュールを用いて製作されていた。

(1) **モールディング**：多くの遺構で確認でき、基壇下部とコーニス、複層型の装飾帯でみられた。製作方法は、基壇下部と複層型の装飾帯では確認できたが、コーニスについては、遺存状態が悪く、確認不能であった。基壇下部のモールディングは、凸面と凹面を別々の石材で加工して積んだもの（図 4、D1）と、凸面と凹面を一石で彫り出すもの（図 4、N8）がみられた。また凸面の加工は、曲面に加工したもの（図 4、D1,N8）と厚み 10cm 程度の板状の石材の上下の角を面取りして、曲面の漆喰の下地とした加工（図 4、K1）がみられた。

(2) **柱形**：20 基で確認でき、柱身の形状には細長いものと扁平なものがみられた。柱形全体が遺存するものは、すべて角柱であったが、塔院東南に位置する D4 には、増広前^{注15)}の柱礎のみが遺存し、隅部は角柱、平部は円柱であることが確認できた。製作方法は、柱身の形状や仏塔の規模により異なり、柱頭、柱身、柱礎を単独に製作するものと一石で彫り出すものがみられた。また各柱形の設置方法には、地石に柱形の加工を施し、石積みの一部として積むものと、柱形のみを単独で積むものとがみられた。なお柱頭については、遺存状況が悪く、その意匠が確認できないものが多かったが、インドコリント式のアカンススの葉紋が確認できる遺構もあった。

(3) **肘木列**：5 基で確認でき、製作方法については、肘木を 3、4 本まとめて彫り出す方法と、肘木を別々に加工し積んでいく方法がみられた^{注16)}。前者は平面規模が 2m 程度の小塔（R5）、後者は一辺が 7m 以上の比較的大規模な塔（J1,K1,N4、大塔）にみられた。なお、肘木列は大塔に設けられた階段の耳石部分でも確認できた。

(4) **壁龕**：壁龕は 8 基でみられたが、すべて柱形をもつ基壇で用いられ、その意匠には三葉形とトラナ形の 2 種類が確認できた。これらの配置には特徴がみられ、1 基の仏塔に 2 種類の壁龕が用いられるのは複層型の塔に限られ、三葉形とトラナ形を交互に配し装飾帯を構成していた^{注17)}。また壁龕が単独で用いられるのは、柱間が奇数の場合の中央部分で、その意匠は三葉形に限られていた。トラナ形が単独で用いられる例はみられなかった。

3-5. 築造面と遺構の層序関係

ダルマラージカ遺跡において、報告書ではいくつか床面が報告されているが、大塔と祠堂 I3 付近等のごく一部に限られる。またそ

図 4 モールディング製作方法説明図 () はマーシャルによる石積み法の分類

他の関連資料でも触れられておらず、現地調査でも床面は観察不能で、築造面による各遺構の築造順序は明らかにならなかった。また仏塔相互が隣接して築造された遺構はみられず、発掘調査により築造順序が確認できたのは、塔院東南の D4 の増広前に設けられた階段撤去後に、J1 の築造が行われたことのみである。

3-6. ダルマラージカ遺跡における仏塔の形態の特徴と変遷

以上、ダルマラージカ遺跡における仏塔基壇の形態の特徴を述べた。ここでは形態の特徴の変遷について考察する。

(1) **基壇形態の変遷**：基壇全体の状態が確認できる遺構数は限られたが、単層型、積層型、複層型の 3 種類に分類できた。マーシャルの編年によると野石積みは古い時期の石積み法で、セミアシュラーは時期が下って現れる石積み法である。ここで各基壇形態の時期差を考察するにあたり、マーシャルによる石積み分類法との関係をみると、単層型はすべて野石積みであり、複層型と積層型はすべてセミアシュラーであった。したがって単層型は古い時期に築造され、積層型と複層型は時期が下って出現したといえる（表 2）。

また基壇形態が判別不能であった遺構 22 基のうち、野石積みで平滑な壁面をもつ D13 と N3 は、現地盤面からの遺存高さが 50-60cm の遺構である。当遺跡における積層型ないし複層型では、基壇下部のモールディングの直上に柱形もしくは獅子列や象列等の壁面装飾が配されるが、D13 と N3 はこのような装飾はみられず、平滑な壁面が 30-40cm 程度遺存している。このことから D13 と N3 は単層型と考えるのが自然である。また同じく地文様積みの P1 は、平面寸法が 7.6m 角で南側に階段が取りつき、発掘時の遺存高さが 2.4m で、基壇下部のモールディングの直上に平滑な壁面が 2m 以上遺存していた。平面規模と高さの関係や上述の壁面装飾の状況を考慮すると、P1 も単層型である可能性が考えられる。

さらにセミアシュラーによって築造されたもののうち、P3,P6 は平面規模が 2.0m 角の遺構で、報告書で「基壇上端まで遺存する」と報告されている^{注18)}。しかし発掘直後の状態が写真等の資料で確認できないこと、胴部が遺存せず、基壇上端の位置が確認不能であることから判断不能とした。しかし P3 は平滑な壁面をもつこと、P6 は柱形を伴うが、平面規模に対して柱形の形状が比較的細長いこと等を考慮すると、単層型の可能性が考えられる。

したがって単層型の可能性のある遺構には、地文様積みやセミアシュラーによるものがあり、このこととマーシャルによる石積み法の編年を考えあわせると、単層型は長期間にわたり築造された可能性が考えられる。

表 2 ダルマラージカ遺跡におけるマーシャルによる石積み法と基壇形態
※下線は、基台を伴う遺構

基壇形態 マーシャルによる 石積み法	単層型		積層型		円形 基壇	判別不能			計
	柱形なし	柱形 あり	セツ バック	複層型		基壇壁面一部遺存		不明	
						平滑壁面	柱形あり		
野石積み	B2,B20, D1,D2, D10,S8	D3	—	—	B3	D13,G8, N3,	St.1,St.4, J2,J3,Q1, S7	E1,E2, G3,R4	21
地文様積み	—	—	—	—	—	N8,M16, P1	—	D4,I3,M7, M7E,M12, T1,T12	10
セミ アシュラー	—	—	K1,N4	St.2,I1, K2,N5, N13, N13N, N16,R5, N26E,	大塔	J4,J5, K3,N2, N24,P3, P8,P10,	N20, P6	B22N,J6, K7,M6, M10,N7S, N9,N10, N11,N12, N14,N14N, N19,N20S, N26,P9, P12S,U1, U2,U3	43
合計	20(8)					22 (9)		32	74

そして当遺跡では、基台を伴う遺構がみられたが、中には基台に地石を二石以上積み、高さを高くしたものがみられた。この基台の高い仏塔は複層型のみでみられ、また基台のみが遺存すると思われる遺構がセミアシュラーにより築造されていたことを考慮すると、時期が下って基台が高い形態が出現したと考えられる。

(2) 外装としての石積み法の変遷：また本研究で分類した外装としての石積み法⑦～⑩の5種と基壇形態の関係をみると、単層型では石積み法⑦～⑩によって平滑な壁面を構築していた。そして積層型と複層型には、装飾下地の加工をした石材を積む石積み法⑩が用いられていた。このことと上述したような単層型から積層型・複層型への基壇形態の変遷とを考慮すると、外装としての石積み法は、時期が下ると装飾の加工を施す石材が壁面の石積みにも組み込まれる石積み法が出現することが明らかになった^{注19)}。

(3) 装飾要素の製作方法の変遷：装飾要素の製作方法は、モールドニングの凸面と凹面を個々に加工して積む方法から、時期が下ると一石でまとめて加工する方法に変化していた。また凸面の加工は石材を曲面に加工する方法から、時期が下ると板状の石材の上下の角を面取りする方法へ、漆喰下地の石材加工に簡略化がみられた(図4)。

4. ジョーリアン遺跡の仏塔

4-1. 遺跡の概要

ジョーリアン遺跡は、シルカップの東北東、ハティアル山から西に向かつてのびる麓からの比高が90mの尾根上に立地する。伽藍は僧院と塔院で構成され、塔院は南北でレベルの異なる上下の院、そして西側の小規模な院の3つの院からなる。(以下、上の塔院、下の塔院、小院とよぶ^{注20)}。各塔院はそれぞれ祠堂列や壁で区切られているが、塔院の中心は上の塔院で、北を正面とした大塔の周囲に小塔群、さらにそれらを囲うように祠堂列が設けられている。下の塔院は、上の塔院の北側の1.2m程低いレベルに祠堂列で区切ら

れ、その南東にL字型に5基の小塔が並ぶ。そして上の塔院の西側に設けられた小院には小塔1基が設けられている(図5)。

マーシャルの編年によると、寺院創建時にまず大塔と小塔A15が築造され、その後逐次小塔が築造されて塔院が形成された。

当遺跡の年代を明確に示す史料は確認されていない。報告書によると、塔院から27枚の貨幣が出土したが、そのうち仏塔内部で確認できたのは、塔A16の舍利室からのヴァースデーヴァ(A.D.3世紀前半)貨幣に限られる。またマーシャルは、当初部分は紀元後2世紀頃、その後修理と増改築が行われ、寺院として整備されたのが紀元後5世紀頃としている。

4-2. 基壇形態

ジョーリアン遺跡における仏塔は、すべて方形基壇であった。遺存状態が非常に良好であり、分類可能な遺構は28基のうち25基で、単層型、積層型、複層型の3種類がみられた(図6)。その内訳は表3に示すとおりであり、複層型が大半を占める。また積層型に2種類の形態があり、ひとつは上成基壇がセットバックするもの(D5, A2)、もうひとつは上成基壇が下成基壇とほぼ同規模のもの(A13)であった^{注21)}。なおA2は、ASI撮影の記録写真によって上成基壇がセットバックした形態であることを確認した。そしてA2と大塔の階段に対して対称に位置するA20は、柱形をもつ1層が遺存するが、遺存部分の装飾の構成、伽藍の中での配置や平面規模等を考慮するとA2と同じ基壇形態であった可能性が高いと考えられる。

また積層型であるA13の隣に位置するA14は、胴部の一部が遺存し、基壇の概形はA13に類似するが、A13の上成基壇と下成基壇の間に獅子列が挿入され、最下層よりも獅子列の上の基壇部分の平面規模が若干小さくなり、その上に胴部がのる構成となっている。したがって複層型に分類した。ここで基壇の構成要素、A13の隣という位置関係等を考慮すると、A14は積層型から複層型への過渡期の形態である可能性が考えられる(図7, 8)。

図5 ジョーリアン遺跡塔院配置図 出典：参考文献3を筆者が修正

図6 ジョーリアン遺跡における基壇形態 ※出典：参考文献3を筆者が修正

表3 ジョーリアン遺跡における基壇形態の分布 ()は基台を伴う遺構

	単層型		積層型		複層型	判別不能	計
	柱形なし	柱形あり	上下同規模	上成基壇セットバック			
上の塔院	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (1)	16 (6)	1 (1)	22
下の塔院	0	0	0	1 (0)	4 (0)	0	5
小院	0	0	0	0	0	1 (0)	1
合計	1 (0)	1 (0)	1 (0)	2 (1)	20 (6)	3 (1)	28

図7 A13 (積層型)

図8 A14 (複層型)

当遺跡では、基台を伴う遺構が 8 基みられた。その高さについては、切石を二石以上積んだ 30cm 以上のものが 6 基確認でき、中には高さ 90cm のもの (A1) もみられ、基台もしくは基壇下部の高い形態の存在が確認できた。

4-3. 石材と石積み法

遺構に使用されている石材の種類は、カンジュールと石灰岩の 2 種類であり、共に近隣で容易に入手可能な石材である。

石積み法については、地文様積みとセミアシュラー、漆喰装飾の下地として加工した石材を積む石積みがみられた。なお大塔と A15 の 2 基は、地文様積みで築造された後、セミアシュラーで修理されたことが発掘調査で報告されている。また石積み法が観察可能なその他の多くの遺構で、基壇下部がセミアシュラーによって構築されていたことが確認できた。

石材の種類と使用部位については、漆喰装飾下地の加工部材にはカンジュールを用い、それ以外には石灰岩を使用していた。

4-4. 装飾要素とその製作方法

装飾要素については、モールディング、柱形、肘木列、壁龕の 4 つの装飾要素がみられ、すべてカンジュール製であった。

(1) **モールディング**：大部分の遺構でみられ、単層型や積層型の基壇下部と複層型の装飾帯に用いられていた。その意匠はトールスとカヴェットの組み合わせが多いが、単層型や積層型の基壇下部にはより複雑な形態のものもみられた。製作方法については漆喰の遺存状態が良く、石材の加工を観察できる部分は少なかったが、複層型の装飾帯では、すべて一石で彫り出すものが多く、それ以外は凸部と凹部を別の材で個々に加工していた。また凸部の加工については、曲面に加工したものと、石材の上下の角を面取りして曲面の漆喰下地としたものがみられた。

(2) **柱形**：基壇の壁面が遺存する遺構の A15 以外のすべてで確認した。その多くは角柱であるが、複層型基壇上部の装飾帯では、イラン風^{注 22)}の円柱もみられた。柱形の製作方法は、柱の規模が比較的大きな大塔と、単層型、積層型もしくはそれらと推測される A2, A20, D5, D6 では柱頭、柱身、柱礎を個々に製作し、それ以外は一石で製作していた。また大塔では柱形に加工したブロック状の石材を地文様積みの地石の一部として積み、それ以外は角柱円柱ともに柱形を単独に挿入していた。

(3) **肘木列**：18 基でみられ、製作方法には 2 つの方法が確認できた。肘木を単独に製作する方法は A14, D5 の 2 基でみられるのみで、他は一石で 3, 4 本の肘木をまとめて彫り出し、パネル状に加工する方法をとっていた^{注 23)}。

(4) **壁龕**：19 基でみられ、すべて三葉形とトラナ形を交互に配置する構成をとっていた。この構成は胴部下部 (A5, A7) でもみられ、基壇以外にも用いられている。また当遺跡では、柱間の数を 4～5 間と比較的多くし、すべての柱間に壁龕をもうける遺構が多くみられた。これは複層型でみられ、単層型ではみられなかった。

4-5. 築造面と遺構の層序関係

報告書では、ジョーリアン遺跡の発掘調査によって、連続した 3 面の床面が確認されている^{注 24)}。しかし各遺構の築造面についての記述はなく、現状でも上の塔院にはコンクリートが敷設され、下の塔院と小院でも床面は遺存しない。また塔が相互に接する形で築造されている遺構がなく、各遺構の層序関係は不明であった。

4-6. ジョーリアン遺跡における仏塔の形態の特徴と変遷

以上、ジョーリアン遺跡における仏塔基壇の形態の特徴について明らかにした。ここでは形態の変遷について考察する。

基壇形態は、単層型と積層型および複層型の 3 種類に分類でき、複層型が大半を占めた。マーシャルの石積み分類法によると、単層型は地文様積み、その他はセミアシュラーにより築造されていた。これとマーシャルの編年より、基壇形態の変遷は、創建当初に単層型が築造され、その後、積層型と多数の複層型が築造されたといえる。また築造面等による層序関係は不明であったが、A14 は、積層型である A13 との比較やその位置関係から、積層型から複層型への過渡期の遺構である可能性がある。また基台や基壇下部に切石を二石以上積み、基壇の高さを高くした形態の存在も明らかになった。

外装の石積み法については、地文様積みは単層型の大塔と A15 に用いられ、セミアシュラーと装飾下地として加工した石材を積む石積み法は、その他の小塔に多く用いられていた。これと基壇形態の変遷を考え合わせると、外装としての石積み法は、地文様積みからセミアシュラーや装飾加工を施す石材を積む方法へと変化していったといえる。

なお当遺跡で大部分を占める複層型では、装飾要素に共通の構成がみられた。具体的には、最下層から獅子または象とアトラスを交互に配置する装飾帯、その上に 4～5 間の柱間に三葉形とトラナ形の壁龕を交互に設けた坐仏と柱形の装飾帯、さらにその上部の装飾帯では、下部のコリント式角柱に対し、イラン風円柱の柱形と壁龕を伴う坐仏といった構成であった。

このことから当遺跡において小塔が短期間に盛んに築造され、その意匠としては、装飾要素の様式化が進み、ひとつの完成形をみたものと思われる。

5. まとめ

これまでにダルマラージカ遺跡とジョーリアン遺跡の仏塔の特徴とその変遷について明らかにした。ここでタキシラの仏塔の特徴とその変遷について考察し、中央ガンダーラとの比較を行う。

5-1. タキシラにおける仏塔の形態の特徴とその変遷

まず基壇形態については、単層型、積層型、複層型を確認した。その変遷については、はじめに単層型が築造され、その後積層型と複層型が築造されるようになる。また時代が下ると、基台または基壇下部を高くすることによって、基壇の高さを高くする形態がみられた。また基壇形態の変遷過程で、積層型から複層型に変化する可能性も指摘できた。

石積みについては、近隣で入手可能なカンジュールと石灰岩を石材の性質にあわせ、軟質なカンジュールは装飾下地、硬質な石灰岩は構造体の石材に使用していた。本研究で分類した外装としての石積み法は、野石積み、地文様積み、セミアシュラー、切石積み、装飾下地の加工石材を積むものの 5 種類がみられ、時代が下ると装飾の加工をした石材が石積みに組み込まれるようになる。

装飾要素については、モールディングの石材の凸部と凹部を別々に加工する方法から、一石で加工する方法へと変化し、凸部では曲面に加工するものから面取りの加工へと変化していたことが明らかになった。また柱形については、角柱のみならず円柱もみられ、壁龕も多用されていた。

5-2. 中央ガンダーラとの比較

これまで述べたタキシラの仏塔と中央ガンダーラの仏塔を比較すると、基壇形態や装飾要素の種類、また漆喰装飾の下地として加工する石材へのカンジュールの使用が共通してみられた。また変遷としては、基壇形態では単層型から積層型、複層型がみられるようになること、装飾要素の製作方法が簡略化していくこと等が共通点としてあげられる。さらに中央ガンダーラにおけるラニガト遺跡、タキシラのダルマラージカ遺跡のように寺院の存続年代が長い場合、様々な基壇形態がみられるのに対し、前稿のタフティ＝パヒ遺跡における上下同規模の積層型、本稿のジョーリアン遺跡における複層型のように、寺院としての存続年代が比較的短い、もしくはある時期に短期間で寺院が整備されたとされる遺跡では、ひとつの基壇形態が大半を占めることも共通している。

一方、相違点としては、タキシラでみられたセミアシュラーという特徴的な石積み法、基台を伴う遺構がみられたこと、さらに基台や基壇下部を高くする形態は中央ガンダーラではみられなかったこと、また使用石材では、タキシラにおいてカンジュールの使用頻度が高いこと、カンジュール以外の使用石材が異なることがあげられる。すなわち近隣で入手可能な石材を使用し、中央ガンダーラでは、カンジュールを多用せず、片岩や粗粒粘板岩を用い、一方タキシラでは、入手が容易なカンジュールを多用し、装飾の加工が必要な石材のみならず、平滑な壁面にもカンジュールを使い、大きな面積の部分に硬質で強度のある石灰岩を用いていた。また中央ガンダーラでは、壁龕を設けた遺構が少なかったのに対し、タキシラでは多くの遺構で壁龕がみられた。

次稿では3地域目のスワートを取り上げ、その形態的特徴と変遷を明らかにするとともにガンダーラ全体について考察を行いたい。

参考文献

- 1) 加藤・矢谷・増井：中央ガンダーラにおける仏教寺院の仏塔基壇の形態と変遷について - ガンダーラ仏教建築における仏塔に関する研究 その1 -, 日本建築学会計画系論文集, 第637号, pp.703-710, 2009.3
- 2) John Marshall: Excavations at Taxila, Annual Report 1912-13, Archaeological Survey of India, pp.1-52, 1916
- 3) John Marshall: Taxila, An Illustrated Account of Archaeological Excavation, 3 vols. Archaeological Survey of India, 1951
- 4) A.Ghosh: Taxila (Sirkap) 1944-1945, Ancient India, No.4, 1948
- 5) 桑山正進・Shah-ji-ki Dheri 主塔の遷變, 東方学報 京都, 第67冊, pp.331-408, 1995
- 6) 桑山正進：タキシラ佛寺の伽藍構成, 東方学報 京都, 第46冊, pp.327-354, 1974
- 7) Kurt A.Behrendt: The Buddhist Architecture of Gandhara, Brill, 2004
- 8) 山崎元一・小西正捷編：世界歴史大系 南アジア史1 一先史・古代一, 山川出版社, 2007
- 9) F.Tissot 著, 前田耕作監修, 前田龍彦・佐野満里子訳：図説ガンダーラ 異文化交流地域の文化と風俗, 東京美術, 1993

注

- 注1) 参考文献1)
- 注2) 参考文献2) 他
- 注3) 参考文献3)
- 注4) 事業の内容は、参考文献2) 等で年次ごとに報告されている。
- 注5) 他の関連資料として、パキスタン政府考古博物館局タキシラ支所 Subregional Office, Taxila, Department of Archaeology and Museums、ラホール城博物館 Lahore Fort Museum、大英図書館所蔵のASI撮影の記録写真を用いた。

注6) ゴーシュ A.Ghosh は、1944-45年にタキシラ第三都市シルカップの発掘調査を行い、参考文献4)で編年、年代観について再考察を行っている。本研究では、遺構の前後関係のみ(時期差)を考察することとし、その基準はタキシラの遺跡を網羅的に扱っているマーシャルの報告書に依拠することとする。

注7) 本稿で使用する遺構番号は報告書の記載番号に依拠し、塔院の中心に位置する塔は大塔とよぶこととする。

注8) 参考文献3) vol.3, plate 45

注9) 放射壁の採用については、参考文献5)で考察されている。

注10) 大塔の周囲に築造された方形基壇に円形平面の構造物がのる遺構について、マーシャルはスタンパ等、他の構造物である可能性も指摘しつつも仏塔として報告している。これについては参考文献6), 7)において、仏塔ではない構造物である可能性が指摘されている。本研究では実際に調査を行ったマーシャルの報告に依拠して研究を進めることとした。

注11) 参考文献3), 8), なお、ダルマラージカ遺跡では僧院も含め、貨幣が総計2,077枚が出土し、インドグreek朝、サカ、バルティア、クシャーナ朝の他、ローマの 아우グストゥスの貨幣も出土している。このことからダルマラージカ寺院は、紀元前から長きにわたり存続したことがうかがえる。

注12) 基壇形態の分類については、胴部の遺存によって基壇の上端の位置が確認できるもの他、その判定基準について参考文献1)で詳述している。

注13) 大塔の西に位置する祠堂内の仏塔I3は、八角形の平面で漆喰床面上に築造されたことが報告されている遺構であるが、遺存部分が床面より一石程度で基壇形態は不明であった。

注14) 報告書では、カンジュールによる石積み(with) kanjur facing は、主に野石積みの外装の石積みで、それはカンジュールによる切石 kanjur block による石積みであることが述べられている。しかし現地調査の結果、マーシャルの分類したカンジュールによる石積み kanjur facing には、切石積みの他に、装飾下地に加工した石材を積む石積み法が確認できた。したがってマーシャルの分類したカンジュールによる石積み kanjur facing には、カンジュールによる切石積みと、装飾下地として加工した石材を積む石積み法が含まれることになる。

注15) 報告書でD4は、当初野石積みの円形平面で、その後カンジュールの方形の基壇に増広され、さらにその後、地文様積みで増広されたことが記述されている。なお、遺存する柱礎は、1回目の増広時に設けられたものである。

注16) 参考文献1), 図18参照

注17) 三葉形とトラナ形を交互に並べる構成は、大塔の後補部分(報告書では紀元後4~5世紀)にもみられる。

注18) 参考文献3), p.263, 報告書では、P3とP6は、K1,K2,K3,N4とともにセミアシュラーの時期の遺構であると報告されている。なお、築造年代の参考になる史料として、K2,K3のために貯水槽を埋め立てた埋土からクジュラ・カドフィセス、K3からはカニシカ、P6からはフヴィシュカとヴァースデーヴァの貨幣が出土している。

注19) ダルマラージカ遺跡では、ラニガト遺跡におけるSt.165のように、平滑な壁面を構築する石積み法である地文様積みと、装飾の下地として加工した石材を積む方法が一つの遺構に併存するような過渡期の遺構は確認できなかった。

注20) 報告書で、各塔院は、upper stupa-court, lower stupa-court, smaller courtと表記されている。これにならない、上の塔院、下の塔院、小院とよぶこととする。なお本稿で用いる遺構番号についても、報告書の記載番号に依拠し、塔院の中心の塔は、大塔とよぶこととする。

注21) 積層型において、ASI写真からA13については胴部下部が確認でき、A2,D5は確認できなかった。したがって前稿と同様に、最下層の上端の直上に方形平面が確認でき、上下の平面規模の差と胴部の規模等を考慮して積層型に分類した。

注22) 参考文献9), pp.71-73

注23) 前掲注16)

注24) 発掘調査によって明らかになった床面は、上の塔院は路盤が川砂利と石灰コンクリート、仕上げは漆喰によるもので、下の塔院は粗く加工した石灰岩を敷き詰め、漆喰で仕上げたものであった。また上下の塔院をつなぐ階段には赤い塗料が遺存していたことが報告されている。

(2009年1月10日原稿受理, 2009年2月19日採用決定)